

も重要な効果をもたらすものと思うのです。たとえば、あ  
る時は英文で。

幼児教育とは、学校、あるいは文字を教えたり、字を書  
くことではなく人と人、家族とのコミュニケーションなど  
を学ぶところに始まると思うのです。

(横浜女子短期大学 学長)

## 障害者地域作業所の役割

玉井 明 (旭区 29歳)

働きたい！働く喜び、働く苦しみを体いっぱい感じた  
い。このことは、障害者のもつ切実な願いであり、また、  
障害者が社会の中で健体者と生活をおくるうえでの接点で  
あると言えよう。このような障害者、障害者をもつ親達の  
願いに応えてつくられてきているのが、身体障害者地域作  
業所づくりの運動である。このような作業所は、五十年七  
月の調べによると、全国に三〇箇所以上もある。また、横  
浜市においても、五二年度に、横浜市が助成対象として、  
その実態を認めた作業所は四箇所、五四年度は、あと二  
三箇所増えると言われている。なぜ、このような障害者の

ための地域作業所づくりの運動が「地域」を強調するよう  
な形で行われてきたのだろうか。

六十年代から七十年代のはじめにかけての高度成長は、  
福祉の分野においても近代的な大規模収容施設をつくり、  
合理的に障害者問題を解決しようと考えていた。その結果、  
人間は家庭であるいは、社会の中で、様々な経験をおし  
て成長するものである、ということに対しての考慮、その  
可能性への働きかけを施設収容という形で奪ってきた。そ  
の批判と反省。また、六十年代から七十年代のはじめにか  
けての大規模施設の力点が障害児に向けられ、障害者施設  
の場合であるならば、短期間のリハビリテーションか一生  
施設暮らしをおくるコロニーというような両極端な効率をお  
もんじた合理的な福祉政策がうちたてられてきた。その中  
では労働をおしての生き生きとした主体的な生への働き  
かけができない状態であった。それらの状況の中で、八十  
年代の中頃からはじまった数々の障害者運動の中で作られ  
てきた視点——障害者も地域の中でという発想が生れ、実  
践的に取り組まれてきている。しかし、地域作業所を見る  
上でのもう一つの重要な視点があることを見のがしてはな  
らない。それは「福祉みなおし論」の一つとしての安上り

福祉としての地域作業所である。財政的には、民間資金に、また、行政的にはボランティア等の地区組織化という形で住民に負担を転嫁し、地域管理化をはかる危険をふくんでいる。このような混沌とした中で地域作業所づくりが進めば進むほど、それだけの運動ではやっていけなくなることになる。障害者が地域で生きるということは二四時間の問題である。しかし作業所を利用する時間は限られた時間であり、残りの時間は家庭でということになる。もし、その家庭が崩壊してしまつたら……。そのような障害者もつ生活一般の問題を地域の中に提起していく原動力として地域作業所の実践的役割は大きいであろう。

(障害者共同作業所「空とぶくじら社」代表)

### 働らく若人のふれあいの場を

根本 愛弓(鶴見区 21歳)

ヨコハマと聞けば、港を思い浮かべる人が多いことだろう。私の母校はその港に近い山手の丘にある。学窓からは遠く大江山塊、富士の秀峰、箱根の連山の美景が四季折々の変化を楽しませ、ヨコハマの街なみが、とてつもなく広

大なキャンパスの中に描かれている。中でも印象深いのは、文化祭の準備で追われていた頃、ふととらえた夕ぐれ時のヨコハマと薄墨色の富士を彩る焼けた空とが、みごとにコントラストをかもし出し、ひととき心のなごむのを覚えたものだった。

卒業後私は就職し、しばらくしてから横浜市勤労青少年センターを知った。このセンターは市の施設として勤労青少年を対象に、年三期の青年教室が設けられ、またふだんはスポーツや各種文化系のサークルを中心に、二千名余の若人が活動している。高校卒業と同時に勤め人になった私は何かしたかった。多くの仲間も欲しかった。センターはそんな私の望みをかなえてくれた場所だ。私はまず、幾つかの講座を受講してみた。また市の交歓会にも参加してみた。現在、私は和裁サークルに所属している。青年教室の着付けの講座を受講したが、きつかけになつて思いがけず多くの知識と興味を覚え、また和裁サークルのリーダーの勧誘も手伝つて、がぜん着物に対する興味が湧いた。しかし私には決定的な欠陥がある。左ききなのだ。はさみはもとより、針も左でなければ運べない私を、先生はうまくリードしてくださった。右ききの先生にとって左の私を